

て、上部に調査者のために調査する場合の注意を書き、その下に、問題を印刷した。この調査用紙の裏面には、知的発達とおなじ調査方法をとった。運動機能に関する質問の一部分、六問が、その記入上の注意とともに印刷された。

知的問題の調査法

知的問題の調査法は、他の部門と多少ことなっている。すなわち、運動機能の一部をのぞく他の部門では、あらかじめ置かれた調査用紙について父兄に記入してもらっておき、しばらくして調査用紙をとりに行く方法がとられたが、知的問題では、調査者が第一回目におとずれるときは、調査用紙を全然おかず、第二回目におとずれたときに、調査用紙を自分で話す口調で読みながら、調査者自身がプラス、マイナス、のいづれかを丸でかこんでゆく方法をとった。

このような方法は調査法全体を面倒にするものではあったが、知的問題の特質から、練習効果があるので、父兄が練習をすることを防ごうとした結果である。たとえば、第九問の「片方の手に指が何本あるかを見ないで言えますか」という質問の場合、もし、この調査用紙をおいておいて、父兄に記入させると、父兄が、「このようなことが重大なのだ」と思って子どもに練習させる結果、正しい得点がでないことをおそれたためである。

調査結果の整理

調査結果は、東京地方と全国とに分け、全国については、北海道、東北、関東、北陸、東山、東海、近畿、中国、四国、九州の地区別にして男女別に、三歳、四歳、五歳、六歳の四つに分けて、各問題ごとに通過率の統計をとった。また男女計について同様の統計をと

り、更に、全国について統計をとった。

このほか、たとえば、「指で物を指しながら数えるとき、いくつぐらいまで数えられますか」という質問のように知的発達の問題には、調査者が、+の場合に数を書きこむようになった質問があったが、これらの質問については、三歳、四歳、五歳、六歳の各年齢について、数値の通過率をしらべた。

通過率

通過率は、情緒や社会性の通過率の上昇が非常に緩慢であるのにくらべて、全部きわめて急激に上昇している。これは、運動機能の発達とともに知的発達の特徴であると推測された。

そのうち、二、三の例を示すと前表のようになる。

五、情緒的発達

松村康平

情緒的発達は、先に示してある調査問題及びその結果の本研究における整理方法をもってしては、それをとらえることがむずかしかつた。情緒的反応が、場面に規定されやすいこと、評価の規準が動揺し易いこと、現象型（見た目にそれとすぐわかる行動の型）が同じようであってもその条件発生的な型は違っているといったことが、情緒的反応に関しては、他の場合にくらべて著しいこと、現象

型の相違は僅少であっても、その条件発生的意味は大きく変化しながら発達することが、情緒的発達に関しては予定されることなどを、その原因としてあげ得よう。

はじめに、私たちは、情緒的発達を知るための問題として、五七問を用意したが、テスト化にあたって残された問題は、二六問となった。各問には、「非常に・度々する」「時々する」「まったくしない」の欄を用意して、適当な欄に○をつけてもらい、前二者をまとめて一群とし、結果を整理したのである。

次に、用意した問題と、その調査結果について述べよう。はじめ、私たちは、十一の問題群を用意した。

第一の問題群は、どういう場面で泣くか、ということに関するものである。主として、対人的な場面をとらえ、そこでひきおこされる不安が、泣く反応をもたらすかどうかをみるのが、ねらいであった(調査問題、一―四)。しかし、調査の結果、本研究の目的にかなう発達の傾向を知ることのできた問題は、(一)母親がいないと母親を求めてなく(このことが、少なくなる。三歳で泣くもの六四・五%、六歳では三六・二%)、(二)ほかの子にからかわれると泣く(減少。六五・二%から五六・四%)である。

第二の問題群は、どういう場面でこわがるか、に関するものである(調査問題、五―十一)。主として、対物的な場面をとらえ、こわがるかどうかをみたのであるが、その結果、残った問題は、(三)大きな音がするとこわがる(減少。五八・〇%から四七・八%へ)。

(四)見なれぬものをこわがる(減少。六一・六%から四二・九%へ)。(五)ひとりになるのをこわがる(減少。七五・七%から六二

・三%へ)。(六)大ぜいの子どもの中にはいるのをこわがる(減少。三四・一%から二一・〇%へ)。(七)ひるよりも夜をこわがる(増大。七六・〇%から七八・三%へ)。(八)おぼけやゆうれいなど実際にないものを想像してこわがる(増大。五九・六%から六七・二%へ)などである。

第三の問題群は、どういう場面で、ちゅうちょするか、に関するものである(調査問題十二―十三)。しかし、この問題は、テスト化には不向きなので、削除した。

第四の問題群は、周囲を認知して、自分で気をつけるかどうかをみるものである(調査問題十四―十六)。その中、(九)叱られぬように気をくばる(増大。四八・四%から六五・六%へ)。(十)大人の眼にとまるとすぐいたずらをやめる(六一・一%から七二・六%へ)などが、残った。

第五の問題群は、自己がどのような状態にあるときに、おこるか、をみるものである(調査問題十七―二十)。その中、(十一)自分ができないのをほかの子が笑うとおこる(増大。七七・三%から八五・一%へ)が、発達の傾向をとらえ得るものであった。

第六の問題群は、どういう場面で、笑うという反応がみられるか、を、みたものである(調査問題二十一―二十三)。その中、(十二)ひとが変わったことをすると笑う(増大。八七・四%から九二・五%へ)に、傾向がみられた。

第七の問題群は、おこったときの反応をみるものである(調査問題二十四―三十)。その中、(十三)おこった時には足をばたばたする(減少。七七・六%から五二・〇%へ)。(十四)おこった時には床や地面の上にな

ひっくりかえる(減少。五一・二%から二九・二%へ)。(15)おこった時には泣きわめく(減少。九〇%から七一・七%へ)。(16)おこった時にはまわりの人に乱ぼうをする(減少。六〇・五%から五一・四%へ)。(17)おこった時にはじっとこらえている(増大。四一・五%から五二・九%へ)などが、残った。

第八の問題群は、情緒的興奮の持続性を、おこることに付いてみようとしたものである(調査問題41-42)。しかし、この問題では、発達の傾向をとらえ得なかった。

第九の問題群は、ひとにぶたれたときの反応をみようとしたものである(調査問題43-45)。この問題でも、傾向をとらえ得なかった。

第十の問題群は、自分の悪口をいわれた際の反応から、発達をとらえようとしたものである(調査問題46-48)。その中、(18)自分の悪口をいわれるとおこる(増大。七八・四%から八九・三%へ)。(19)自分の悪口をいわれるとじっとこらえている(増大。三七・五%から五一・〇%へ)などが、発達の傾向を示した。

第十一の問題群は、これまでに述べたものとはやや趣きを異にするもので、その情緒的発達が世の中を明るくすることと関係のあるもの(調査問題49-57)。その中、発達の傾向をとらえることのできた問題は、次のようである。(20)ほかの子の喜ぶことを自分からする(増大。六二・五%から七八・五%)。(21)大人の喜ぶことを自分からする(増大。六七・〇%から八〇・〇%)。(22)草や木をいたわる(増大。五五・八%から七九・〇%へ)。(23)動物をかわいがる(増大。八〇・〇%から八八・六%へ)。(24)自分より小さい

子をかかわいがる(増大。八四・一%から九〇・九%へ)。(25)おもちゃを大事にする(増大。六三・六%から八〇・〇%へ)。(26)自分の好きな人がほかの子の世話をしたりかまうのをいやがる(減少。七二・〇%から五七・二%へ)。

右に述べたように、用意した十一問題群・五七問は、八問題群・二六問となったわけである。

六、社会的発達

——社会性の発達について——

児 玉 省

社会性とは何であるか？ ということは、はっきり規定せられてはいないようである。乳幼児が、はじめて人の顔をほかのものから区別できるように、また自分を世話してくれる人達をそのほかの人達から区別できるように、これらの人達にほほんたり喃語したりするようになり、やがて自分と同年輩位のほかの子供たちには注意を払い、声を出したり、喃語したりするようなのは、シャローテ・ビューラーが、「人を人以外のものとのちがったものとして、反応している」もののがい当しているようで、比較的わかり易い。けれ共三・四歳から上の子供の場合の社会性として心理学の本がとり上げているものは、所謂の社交性、秩序に服従、協力、親切、競争意識、所有意識などのほか、広汎な項目を包含している。でこ